

今や「ヒトの営み」は、宇宙からも見えるようになりました。ヒトが造った建造物や都市が巨大化したことに加え、人工衛星のカメラの性能（主として分解能）が向上し、かつては映らなかったもの、変化がわからなかったものをとらえることができるようになったからです。

リアルタイムで画像が公開されていて、我々一般の者が普通に閲覧できる衛星画像の一つに「気象衛星画像」があります。主として対流圏（大気圏の最下層）の雲の様子や動きを観測するためのものです。しかしそれとは別に、地上の広範囲の積雪の範囲や、黄砂の広がり、洪水（溢水や決壊などによる氾濫）の様子をとらえることもあります。浅間山や桜島などの活動が盛んな活火山の場合、風向きによる噴煙（主として細粒の火山灰）や噴気の広がりも観測できます。海底火山の噴火時には、海面の軽石列の移動もとらえることもあります。

今回、三陸の大船渡市を中心に発生した山林火災の様子も、気象衛星がとらえていました。さすがに火災の炎は見えませんでしたが、陸から海に向かって、明らかに雲とはちがう色の「山林火災の煙」が広がっている様子が映っています。気象衛星は我々にさまざまな情報をもたらしてくれますが、時には「ヒトの負の営み」もとらえることもあるのです。

（2025年3月上旬／衛星画像）

